

行政調査報告書

- ・農林水産省
- ・門倉農園

令和5年9月6日（水）

大阪維新の会 大阪府議会議員団
農業政策調査研究会

農業政策調査研究会視察

◇視察日

令和5年9月6日（水）

◇視察参加議員

牛尾治朗議員、西元宗一議員、前田将臣議員

◇視察先

- ① 農林水産省
- ② 門倉農園（江戸川区）

◇視察の概要

- ① 農林水産省

主な対応者： 農村振興局農村政策部農村計画課職員

【内容】

都市部での農業について、東京や日本各地では、都市部での小さな面積でも、年に何回も収穫を行うことで収益を確保している事例や、農家レストランや体験農園等の経営を行って収益を確保している事例、宅地から生産緑地にかえた事例等がある。

農林水産省では、都市農業が都市住民との共生を図りながら発展していくための、農山漁村振興交付金による助成等を行っており、また自治体の取組みとして、例えば東京都練馬区では、農業体験農園や「ねりま農サポーター」の育成等を行っている。

【都市農業の概要説明後、質疑・意見交換】

議 員：都市農業の機能を発揮する対策は、直接農業経営体の方に交付するものか、基礎自治体を通じて交付するものか。

農水省：国から直接支援。よく手があがるのは、都市農業者と都市住民が直接ふれあうマルシェの開催等による交流促進のための取組への支援で、上限金額100万円、最大2年間の補助がある。マルシェのテント・のぼりや、公園でイベント出展したときの出展料、臨時のスタッフの賃金に対しても補助できる。

議 員：ハード整備にも使えるのか。

農水省：少し制限あり。ハードに使えるのは、市民農園等の附帯施設の整備や都市農地の周辺環境対策となっており、例えば都市部での市民農園等の場所で、砂ぼこり等による周辺住民への迷惑防止のための防砂ネット等、簡易な整備は対象としている。一方、重機を入れるような大掛かりなものは対象外となる。個人の農業経営への直接の支援というよりは、これから市民農園・体験農園をする際の受け入れるための施設、例えば、簡易トイレの設置等の支援をしているところ。

議 員：市区町村も対象に入っているが、どのような事例が多いか。

農水省：都市農業の中で、防災機能の発揮というところあり。防災機能の維持強化ということで、例えば大阪であれば、摂津市の防災協力農地での、避難訓練や、看板の設置に際して。

議員：例えば自治体が農業祭を行うとき、大きな都市公園で、地元の農家に出てもらい、地域の産品を販売、近隣の住民の方に来てもらうようなイベントにも活用は可能か。

農水省：可能。

議員：これはいつごろからあるのか。

農水省：平成 30 年に創設。令和元年には、練馬区で世界都市農業フェスティバルというイベントをする際、知ってもらうためのプレイベントとして、練馬区が主催しマルシェを開催。イベントの周知・広報の際に、手をあげてもらった例もある。

議員：市単独となると金額の捻出が難しいこともあると思う。補助は定額だが上限は。

農水省：マルシェが 100 万、附帯施設の工事が 250 万円、防災機能が 150 万円。

議員：案分率が 1/2 とかではないのか。例えば 100 万円の事業であれば、まるまる 100 万円もあり得るのか。

農水省：そのとおり。

議員：事例の中で、農家レストランで売上をあげている例があったが、農家レストランをやることに對して、規制がかかる部分はあるか。

農水省：兵庫県の事例であれば、生産緑地での経営になる。平成 29 年の法改正によりできるようになったところ。現在特に規制はなし。ただし、農家レストランを経営ということは、飲食店の経営となるので、保健所の許可を取る必要あり。また、「農家レストラン」と名乗るためには、地元の農産物を半分以上使用する必要もあり。

議員：例えば、地域的に水ナスの生産あり、農地の一角を使い、レストランで水ナスを使った料理を提供しつつ、お土産販売も行う建物を立てることは可能か。

農水省：可能だが、規模面積や、もともとの農地を何%残すといった国交省管轄の上限もある。もともと生産緑地は小さく、その場で大きく加工まではあまり。一つの農地で完結するのでなく、商店街等さまざまな事業者を巻き込んで行うのも方法の一つ。

議員：地方の JA と連携して良い成果が出た事例はあるか。

農水省：事例として、6 次産業化で夏ミカンのジャムを作り、地域 JA と連携して、たくさんある直売所に商品を置いたことあり。東京都では、江戸東京野菜という伝統野菜について、JA と連携して、伝統野菜のレシピコンテストを高校生等も巻き込んで、振興することもある。

議員：全国的に見て、広域自治体の中で、都市農業に積極的に取り組んでいるところは。

農水省：東京都。生産緑地は相続税が大きくかかる一方で、農地が相続等で少しずつ減少していく。その中で、東京都は農地を残そうとしている。また、東京都ではお金を払ってでも農業体験やりたいという人が多い印象。都市住民も農地を求めていることをしっかり把握して農業振興をしているのが東京都。また農家は援農ボランティアが欲しく、都市住民もボランティアとして参加したいとき、それぞれの情報を登録し、気軽にできるものを、東京都がスキームして、積極的にやっていると感じる。

議 員：ボランティアは年代も幅広いか。

農水省：幅広い。もともと援農ボランティアはセカンドライフを考える人が来ることが多かったが、コロナの影響もあり、若い人のリフレッシュで農業を行うことも。

議 員：利益考えなければ、農業は楽しい。自分もしていて、利益は全然でなかったが。

農水省：都市部の農業で面白いところは、一人では大変なところも、農業体験で例えば 1 人 5 万円とか、そこで利益が出てくる。天候にも左右されず、持続的に利益が上がりやすい。1 次産業でありながら、サービス業のようなところも。

議 員：体験農園をこれから整備していくところが大阪府でもあり、いろいろな制度を活用して整備していきたいという声を聴く。国のほうで制度はあるか。

農水省：今のところ農水省で、市民農園、特に都市部となるとあまりない。田舎であれば、農村漁村発イノベーション対策あり、中山間とか市民農園・宿泊施設を伴ったものの支援金はある。一方で都市部では、トイレの整備等の補助になってしまう。なお兵庫県等で、新しい市民農園を作る際の補助や、老朽化したリニューアル用の支援は聞いたことがある。国ではないが地方自治体ごとに用意しているケースあり。

議 員：国策として、都市農業の中で体験農園を支援することはあまりないか。

農水省：農業体験も重要と考えており、予算要求等も考えているが、整備に対して大きく要求は今のところなし。

議 員：都市近郊農業で、面積の収益を上げていくよう取り組んでいる中で、生産物の効率化も限界ある。農業しながら、付加価値をつけ、いかに新たな収益に繋げていくか、その中の一つとして、収穫体験の検討や、インバウンドが増えてきている中での日本の農業体験とかも考えられている。広域自治体としても考えていかななくてはいいけないが、国としても何か議論があれば。また、万博と関連した農業の議論もあれば教えてほしい。

農水省：直接の関与ではないのであいまいだが、都市農業機能発揮の対策として、農泊関係、今後の万博の拡充要求（ジビエとか）の準備をしていると聞いている。東京オリンピックの際、選手に食べてもらうための GAP の予算を進めていたので、万博も引き続き、と聞いたこともある。

議 員：水耕栽培に近いアクアポニックスについて、万博の会場でも導入するかもといった話を聞いた。農水省での認識や、東京で活躍されている事例等あるか。

農水省：事例として、AGRIKO（目黒区）が、喫茶店の屋上でアクアポニックスし、下の喫茶店に野菜等を卸している。他、都市農業からは離れてしまうが、繁昌農園（青梅市）が、サンシャイン水族館と連携し、こういった新しい循環型の取組みを子どもたちに伝えるために行っている。

議 員：企業参入の事例はあるか。農地を株式会社が取得して、伸びているような。

農水省：今のところ把握なし。都市部に関して、企業参入は、連携して参加が多い。都市部の地価が高いこと、また、これまで農地で行われている農家を尊重して、農地取得ということ聞かない。

議 員：大阪はスマート農業のデータ管理をして、いいものを効率よく作っていく取組みが

進められているが、東京都の導入状況等はどうか。

農水省：東京も進んでいる。スマート農業で新しく機器を導入する際の補助や、ネイバーズファームが環境制御型を行う際、計 1 億円ほどかかったそうだが、東京都が支援（5000万円ほどだが、他にも、市が2500万ほど支援、日本政策金融公庫が無利子で1500万円ほど融資。）。

他にも、スマホで農薬の管理等ができるベンチャー企業が出したのに対して、東京都がタッグを組んで、より機能を拡張することを積極的に行っている。

議員：東京は農地そのものどうか。大阪は点在・水がない等課題あり。

農水省：都市部のほうが飽和状態、東京で新規就農したくても農地が見つからない状態。ただ生産農地については、年々農地そのものが減っているのが現状。

②門倉農園

主な対応者：門倉農園代表取締役

【内容】

住宅化が進んだ都市部で、農業を営んでいる農家への視察として、住宅やアパートが密集している住宅地の中に農地が点在している、門倉農園への視察を行う。門倉農園では、小松菜を栽培しており、学校給食や、袋詰め百貨店や成城石井等スーパーに卸している。農業を営んでいる中での工夫や、都市部での課題等について意見交換を行う。

【現場の視察および意見交換】

農園：農家自身の努力も必要だと考える。当農園では、営業努力や、例えばこの夏の猛暑による葉物の栽培が厳しい中でいつでもあるという信頼を得る、品評会でトップを取り続ける等、ブランディングを行っている。他にもメディアに出演し農業が楽しいというアピールを行ったり、知識を教えている。

都市農業の大変さは、周辺が住宅のため、においや水が問題になることがある。また、農地の周りに、後から住宅が建つことによって作付面積が減少することもある。面積がある程度残っていないと、仕事を続けられない。相続で農地が減り、出荷量も減ってしまうことも。また、農産物は市場で値段がつけられており、一般の農家は値段交渉しづらい。

議員：生産している場所の周りに後から、という話はよく聞く。農地のところに事業所を誘致したいとなり、実際は、確かに法律的には日照権は守られているが、農家にとっては足らず、作付けできなくなり、営農できなくなることも。

農園：隣に畑がある場合は、といった法改正や規制をしてもらわなければ。また、納税猶予も厳しい。例えば隣に建物が建ち日当たりが悪くなったといった等、周辺環境の変化で売上が減少し、農家を続けられないときでも、納税猶予が邪魔をしてしまう。

議員：都市農業は特に良い場所に土地が多く、周りが開発され、営農できる環境でなくなっ

てしまうという状況はよく聞く。また冒頭、個人的にも問題意識が近いと感じたが、今までの農業は生産が99%で、営業を行われている農家の方はあまりいない印象。

農園：他の農家は生産者だが、自分は経営者として行っている。土台の作り方が違う。

議員：バリバリやっている農家の方は、生産はもちろんだが、自分自身が出て営業を行っている。生産を重視されている方にいかに営業に出てもらおうかが、なかなか難しい。

農園：全国的に安く取引されすぎといった感もあるが、いかに売っていくかはこちら側。

議員：売値の話はよく言われる。生産者からは、買い手のほうが価格決定力が強いので、言われたらその値で売らざるを得ないからと。

農園：契約を取ってきて、ずっと納品し続けていると、信頼関係も作られていき、また、顧客が付いてくると店側も切れなくなり、価格交渉もできるようになってくる。今まで農協にまかせていた農家は、供給が不安定なこともあり、信頼がなかったりする。農家自身の信頼関係づくりが大切。また、1日農業を行い、市場に卸して、次の日にいくらでしたともらうのは、経営しづらい。単価を決めて、出荷量のスケジュールが決まっていたほうが、来月の売上もわかる。その金額が保証されると、例えばスタッフを入れるか等を考えられる。地元の農家なので、地域の人に少しでも仕事の場所や賃金をということもあるが、スタッフを入れると自分の時間もさけるようになり、違うことができるようになる。

議員：採用するにあたっては、一定程度営農経験等は見ているのか。志望動機などは。

農園：4人中1人は営農経験あったが、他は経験なし。今は袋詰めとかもやってる。募集をかけているだけだが、農家のイメージがわからない部分もあると思うので、2回くらいお試して来てもらい、その中で判断している。職場のルールは自由度が高いと思う。長い人は10年近く、若い人でも1、2年。他には、たいがい農家は朝から晩まで1日ずっとやっているが、7時から始めて1時くらいには終わる。短時間で終わらせて、午後は違うことをする（例えば百貨店に並んでいる自分の商品やその周りの商品を見に行く）。

議員：なかなか聞かない。朝から晩までずっと生産現場にいて、というイメージがある。東京でこのように精力的にやっている仲間はいるか。

農園：相方と合わせて二人でやっており（K&KFARM）、どちらも同実力の小松菜を生産しているため、より商品を切らさない仕組みとなっている。同実力で探すのは難しいが、最終判断するのはもちろん消費者の人で、質が違うといわれてしまったら、一緒にはやっていけない。変わらない評価があることで成り立っている。やってみたら意外とうまくいくこともあると思うが。

議員：そこで二の足踏んでいる人が多いので、うまくいった事例として話をさせてもらう。

農園：農家さんは自分の農地に人を入れたくない人多い。

議員：収益はどうか。

農園：農家の全国平均はだいたい4～500万円くらいで、1000万円超えるのは何%いるか。自分は3000万円くらい。K&KFARM全体では5500万円くらい。

議員：JAとの付き合いはもうないのか。

農園：付き合いはあるが、もともと地方の JA のように野菜を販売してくれるわけではなく、普通の金融。

議員：営農面積は増やしているか。

農園：増やしていない。面積増やしても、結果追加で人を雇ったりと、計算すると収入変わらず。どのくらい手元に残るかを考えられるかも、一つのコスト削減につながっていく。百貨店などに営業したのは10年も前だったが、珍しいことだった。だが、自分で一生懸命作ったものは、自分で値を付けたいし、どこで購入できるかと聞かれることもあって、ここで買えるといえるようにもなった。

あとは自分のもののブランディング化。自分は百貨店や高級スーパーのみに出している。そうすると、周りも高いものと認識し、ちょっと値上がっても大丈夫。そのため、周辺のスーパーは断っている。袋詰めにも工夫あり。小松菜も大きく太く作るよう変え、たくさん出荷できるようにした。ただし、大きくするためには、その分畑で長い期間栽培することになるので、栄養分とかのノウハウとか必要でもある。

議員：種まきとかはどうされているのか。

農園：押す機械あり。都市農業はトラクターを一回買くと2代位使え、農薬の量も多分少ない。ハウスを持っていると、張替の費用が高いが。

議員：今回話を聞いて、とくに印象的だったのが、「みんな早く帰りたい」というところ。新規就農する人も、時間も長く大変で先も見えず、やめてしまう人も多い。話の中で、経営を合理化し、作業も効率化しているのが、継続的な働き方だと感じた。東京・大阪間で農家同士のやり取りとかなないのか。

農園：ない。自分は連絡もらえること多く、出会いも多いと思うが。

議員：独立して自分でやっているという人はいるか。

農園：なし。ここで技術を学んでいざ営農しようとしても、新規農業は、農地を持つところから難しい。自分はむしろ常勤の社員が欲しいくらい。

議員：体験農業とかは検討しているか。

農園：江戸川区では、学校の授業で農業体験あるが、基本無料。そのため断る農家も多い。そこで、自分たちは体験料の設定をしつつ、付加価値を付けた体験をしてもらおうと検討はしている。



以上